「ひとはく」はどんな所につくられたか

深田谷奥から見た「ひとはく」本館。両側は里山林。

神戸電鉄公園都市線フラワータウン駅で降り、地図をたよりに人と自然の博物館、通称「ひとはく」、はどこにあるのだろうと調べてみても、簡単には見つかりません。「ひとはく」は4階建てですが、4階床面の標高はフラワータウン駅前の標高（195.5m）とほとんど同じで、手前の「ひとはく」屋上に通じる歩行者用の橋の方がはるかに目立つのです。開館時に設けられたエントランスホールも格好の目印にはなりえませんでした。

「ひとはく」はなぜこうもわかりにくい所に作られたのでしょうか？それにはわけがあります。1980年代になると三田市南部の丘陵地で、広域にわたりニュータウン建設工事が始まりました。フラワータウンでは、まず三田幹線とフラワータウン周回道路東側の原形が出来あがり、現在「ひとはく」が位置する谷（深田谷）に長さ約160m、幅25mの橋が架けられました。1988年には橋の下に、全面ハーフミラー張りのパビリオン館が作られ、それをメイン会場として都市博覧会が挙行されました。このパビリオン館が内部改装され、1992年10月10日に、「ひとはく」が開館しました。それゆえ、「ひとはく」本館は、川をせきとめたダムのような構造になっているので、細長く、4階床面が地表レベルに相当し、下の階ほど床面積が小さくなっています。収蔵庫棟は本館北東側の斜面を削り取り、1991年に新設されました。

下の図はニュータウン建設前の1967年作成の地形図に、現在の道路の一部、学校、里山林の分布を記入したものです。ニュータウン建設前は、人家は皆無、小さな浅い谷が無数に走る小高い丘陵地で、全面緑に被われていました。標高230m以上の高まりは図の左端、神戸市北区との境界付近と、現在のフラワータウン駅東方に限られています。谷の奥まった所にはため池があり、かんがい用に利用されていました。「ひとはく」本館にさえぎられた深田谷には、収蔵庫棟の前から本館南側にかけて池があり、その池の西には4つに分岐する谷が延びていました。となりの円形野外劇場も池を抱いた谷地形が埋めたてられて造られたものです。三田幹線を隔て、フラワータウン周回道路の西側には新たに「新コモ池」が設けられました。

この図の等高線と現在の地形を較べてみると、ある地点がどのくらい削り取られたか、埋めたてられたかについて、おおよその見当をつけることができます。フラワータウン駅東方にあった230mの小丘は30m以上削り取られ、平坦にされました。三田幹線やそれと中国自動車道を結ぶ道路は、最大約20mの地表の掘り下げと多量の盛り土によってつくられました。10m以上埋めたてられた谷は至る所に見出せます。ため池も多くは消失し、面影すら残っていないものがほとんどです。

フラワータウンでは、ニュータウン建設により約95%の里山林が失われましたが、深田谷の両側斜面には、虫食い状に残された里山林の大半が集中しています。「ひとはく」付近の深田谷本流は、フラワータウンのなかでは、大規模な土地造成工事を免れ、かつての面影を残す例外的な所といえるでしょう。

（自然・環境評価研究部
小林　文夫）